

ドイツにおける家族史研究と家族社会学 Heidi Rosenbaum のアプローチを中心として

Ulrich Möhwald (ウルリッヒ・メーワルト)

Georg Schwäglер は、彼のドイツ家族社会学の発展に関する大作『家族の社会学』の中で、1960年代以降の社会史的研究の結果に基づけば、家族社会学の幾つかの根本的な学説も問題になりうることを強調した⁽¹⁾。同様に、ドイツの家族社会のむしろ「古典的」な立場を代表する René König も比較的早い時期に、歴史的研究の成果に従って自分の構想の変更が必要であることを認めている⁽²⁾。

1960年代以降家族の歴史に関する研究はかなり発展した。この研究の成果はドイツの家族社会学者の1960年代および1970年代に育った世代に強い影響を及ぼして、この世代が持っていた従来の「支配的」な学説、つまり構造機能主義の家族論に対する批判の一つの根拠になった。この若い世代の代表者の多くは、「新左翼派」とフランクフルト学派の「批判的理論」ないしフェミニズムの考え方に基づくマルクス主義を背景としている。本稿では、Heidi Rosenbaum の学説を中心としてこの批判の展開を家族の歴史的な研究の展開に関連して述べてみたいと思うのである。

1.

社会史の対象として家族は、1950年代と1960年代の初めにアメリカとイギリスにおいて、その後フランスにおいて取りあげられた。ドイツ語圏の諸国においては1970年代にかなり遅れて取りあげられた。

アメリカの三つの大きな解放運動、すなわち公民権運動、学生運動、ニ

ューフェミニズムは一般に下層階級の日常生活の歴史の研究に、特に家族の歴史の研究に強い刺激を与えた。もう一つの重要な要因は発展途上国の問題や構造機能主義の批判と結び付いて、1950年代の終わりおよび1960年代の初めに社会学が社会運動の問題により強い感心を示したことである。これは、ある程度社会学の歴史化をもたらすことになった⁽³⁾。学際的協同研究や明確な歴史社会科学的なアプローチの発展と結び付いて、そのことは新社会史（New Social History）の展開に結実した。

イギリスにおいては社会史と社会人類学との緊密な関係やアメリカとの集中的な学術交流およびフランスの歴史人口学の影響が新社会史、従って又歴史的家族研究の興隆にとって決定的であった。

フランスの場合に、主としてアナル派⁽⁴⁾が家族を対象として捉えた。それは構造主義的な歴史学のアプローチとして、数量化的な方法を用いて歴史的過程の根本的な傾向を理解することを目指す。この派の場合には、歴史的・社会学的な問題提起が不十分にしか考慮されていない⁽⁵⁾。

若干の局面の違いを伴いつつ、新社会史とアナル派のアプローチはその後主としてオランダやスエーデンやハンガリーにも受容された。日本では特に速水融がその領域を研究し、中根千枝も若干の発表をした⁽⁶⁾。速水の影響の下に西洋の学者も日本で歴史的家族研究を行った⁽⁷⁾。

ドイツでは、家族は非常に遅れて歴史学や社会史学の対象となった。Hans-Ulrich Wehler が編集した『歴史と精神分析』（“Geschichte und Psychoanalyse”, 1971）、『歴史と経済学』（“Geschichte und Ökonomie”, 1973）、『歴史と社会学』（“Geschichte und Soziologie”, 1976）、また Hans-Peter Lutz が編集した『社会学と社会史』（“Soziologie und Sozialgeschichte”, 1972）、やさらに1975年に創刊された雑誌『歴史と社会』（“Geschichte und Gesellschaft”）等からよく判るように、1970年代において歴史学でも社会学でも両者の関係は大きなテーマになった。しかし、ドイツ語圏の諸国での歴史学と体系的な社会科学との関係が良好でなかつ

たことが家族の歴史的研究が遅れた理由であると思われる。しかし、社会科学の方に開けた社会史学の一部分の研究においても大体マクロ的構造の認識が目指されている。

ドイツでの歴史的家族研究にとって、より強い刺激はとりわけ Werner Conze を中心とするハイデルベルクの現代的社会史研究会 (Heidelberger Arbeitskreis für modern Sozialgeschichte) や民族学によって与えられた。ドイツ語圏の諸国での歴史的家族研究のもう一つの中心はウィーンである。しかし、この場合の刺激は大学のアカデミックな研究からではなく、オーストリアの高等学校における社会科授業のための学問的な資料を作る必要から生み出された⁽⁸⁾。

現在の歴史的家族研究の重要な問題は歴史人口学の影響とそれに結び付いた数量化的な方法の過度の強調である。ここには数字的史料の意義の一面的な過大評価と同時に史料批判の不十分さという危険が存在している。この上、研究の目的を一面的に史料から規定させ、分析、解釈、理論形成のない単なる記述のみにとどまる傾向もあると考えられる。数量化的な研究方式にとって決定的基準である精密な概念規定の困難さは、この種の歴史的家族研究の結果としての命題の意義をさらに制限することになる。それで、「家族構造」⁽⁹⁾をその社会的な関連性において規定しうするためには、数字的な史料と普通の史料（中世・近世考古学的なるものを含む）との組み合わせが無条件に必要である。それらの問題性はケンブリッジ・グループのいわゆる MHS 測定において特に明らかにされた⁽¹⁰⁾。

2.

Rosenbaum およびその他の批判者は、何を従来の家族社会学の根本的な理論として理解するかということを次のように要約できる。

家族社会学の対象は現代の家族である。何を家族として理解するかという家族社会学の概念形成において、その対象の歴史性は殆ど省みられない。

にもかかわらず、そこには具体的な歴史研究の成果に基づくのではなく、「伝統的家族」から「近代的家族」への構造変動に関する特殊な理論的な先入観が存在している。そのことは、「伝統的家族」と「近代的家族」の二分法の構想に示されている。その場合に「伝統的家族」とは社会的に統合され、伝統に束縛された、家族成員全てが家長（Hausvater）の権威に隷属している家父長的大家族を内容としている。これに対して、家族の「近代的」な類型は社会的に孤立している個人が親密に感情的な関係で結ばれた協同的な小家族として把握される。簡単にいえば前工業化時代における大家族の一般的な存在の主張である。種々の修正にもかかわらず、この主張の系譜は19世紀半ばの Riehl および Le Play の家族論にさかのぼる。多くの場合には、Riehl および Le Play と同様に、この主張は家族についての保守的な社会政策観にも結び付いている。

この二分法的構想は家族の機能変動の概念に緊密に結び付いている。この変動の内容は家族の「収縮」（contraction de la famille）、家族の「機能喪失」（Funktionsverlust der Familie）、家族の「分解」（Desintegration der Familie）、家族の「一般的な順応危機」（allgemeine Anpassungskrise der Familie）、家族の「解体」（Desorganisation der Familie）等の概念で捉えられている。そして、「産業化」（Industrialisierung）、「都市化」（Urbanisierung）、「動員」（Mobilisierung）、「官僚化」（Bürokratisierung）、「民主主義化」（Demokratisierung）、等という概念で表現される一般的な社会変動の結果として、いわゆる「近代的」な小家族は「伝統的」な大家族のいわば「欠陥のある様式」（defizienter Modus）として発生するのであると考えられるわけである⁽¹¹⁾。

家族社会学的な概念規定は、その場合に人類学上の有効性が認められた生物学的・人類学および心理学的な要素に限定される。このような家族の定義は普遍的な、すなわち歴史的・文化的な、あるいはまた階級的に特殊な条件に依存しない有効性を持つものと考えられている。つまりこの定

義は超文化的であると同時に超歴史的な有効性があるはずだというのだ。社会学的な認識の成果は一般にこの定義に入っていない。しかし、社会学的な分析に有効な概念形成はまさに社会学的な認識を根拠としなければならないはずである⁽¹²⁾。そのような定義として典型的なものは René König の次の定義である。

「家族は、その成員が親密な感情および協力および相互扶助の関係で結ばれた特有の集団である。家族関係は集団の中の親密性と協同の性格を持っている。さらに、この集団は自分自身を自ら再生するのである。」⁽¹³⁾

この定義は同じように成員の感情的融合に重心を置く戸田貞三の『家族構成』(1937)における概念規定に非常に似ている⁽¹⁴⁾。そのような概念規定においては、血縁は家族の成員であることを決めるための決定的な基準になる。特に父母と未婚の子供から構成された集団は、家族や世帯のどの形態においても社会関係の中で分化して存在するものと認められる⁽¹⁵⁾。ついでにいえば、このような考え方はマードックの「核家族の普遍性」(1949)という説が初めてのものではなく、例えば、戸田貞三は前述の家族概念規定で次のようにいっている。「家族は夫婦、親子およびそれらの近親者よりなる集団である。」⁽¹⁶⁾このような概念規定はさらに現代の家族状態に基づく現実の解釈 (Realitätsdeutungen) によって決定的に影響されている。特に、中産階級の家族形態の在り方は、従来の家族社会学者によって家族の普遍的な状態として理解され、そしてこのような理解は現代の父・母・子の役割を過度に強調することによって核家族はいわば生物的な状態として構成することに帰結する⁽¹⁷⁾。その場合に、家族はまた隔離された、親密な、外に対して閉ざされた「職業世界の反対構造」(Gegenstruktur zur Berufswelt)⁽¹⁸⁾ないし「社会の反対構造」(Gegenstruktur zur Gesellschaft)⁽¹⁹⁾として理解される。Rosenbaum は次のように言っている。

「西ドイツ家族社会学の二つの根本的なアプローチ (Helmut Schelsky および René König のそれを意味する一筆者註) が家族の領域との対極

性を確認しているということを証明することができた。これによれば、家族は社会全体ないし他の社会領域に対して全く反対の構造を示す、隔離された、比較的独立に作用する自律的な領域であることになる。したがって、家族がこのように他の社会領域から切り離されて把らえられることによって、家族的な存在に協同生活の特別の性質を与えられる。個々の家族成員は人間的に感情的な関係、そして非人間的な、抽象的な、官僚的な環境に対する、また我々の全社会生活と公開の領域を支配する匿名の大組織に対する保護を唯一このような協同生活において見出すのである。これに対して、家族の具体的な親密性は積極的に、明らかな対照をなすのである。」⁽²⁰⁾

3.

家族と世帯の歴史的研究の成果によれば、家族社会学の以上のような根本的な理論に対して、幾つかの異議を申し立てることができる。

まずケンブリッジ・グループは上述の MHS 測定で大規模に前工業化時代において大家族が一般的に存在するという説を経験的に検討することに目指した。その場合に家族ないし世帯の再構成化 (Familien - oder Haushaltsrekonstruktion) の方法を用いられた。この方法で、教会記録簿 (Kirchenbücher) ないしセンサス表 (Zensus - Listen) から抽出した多数の数量的なデータをもって家族ないし世帯の大きさや構成が再現される⁽²¹⁾。これらの研究および同じようなフランスとオーストリアの研究はヨーロッパにおいては16世紀以降一貫して多くの世帯が小規模の、多くの場合に核家族と等しい規模のものであったことを示している。この傾向は全ての階級にとって当てはまるが、しかし階級的な差異も明らかになった。社会階級が高ければ高いほど大きな世帯も多くなり、小さな世帯は主として下層階級に通例であった⁽²²⁾。以上のようにして前工業化時代に大家族が一般的に存在するという説の誤りが証明された。

上に見た MHS 測定の成果から家族ないし世帯の社会的存在形態について、もっと広範囲な結論を引き出すことはこの方法の持つ問題のゆえにで

きない。方法上の問題とはケンブリッジ・グループが数量的な方法と数字の上の史料に固執するということにある。ケンブリッジ・グループにはこうして得た統計的な成果を不適当な比較の根拠に利用する誤った傾向がしばしば見られる⁽²³⁾。

しかし、この間に生まれた事例研究で、数量的な方法だけに基づくのではなく、もっと広い史料を根拠として利用した幾つかの研究は、特にオーストリア人の Mitterauer はその結果の一般化は不可能であるとしても、色々な事柄を明らかにした。そして16世紀以降⁽²⁴⁾はヨーロッパで多種多様の世帯ないし家族の形態が並行して存在し、または時代的かつ地方的なまた社会階級上の大きな変化のあったこともだんだん明らかになってきた⁽²⁵⁾。その場合に家族ないし世帯の大きさや構成を決定する根拠は家族周期および経営と労働組織であったようであり、そしてこれらは法律のおよび様々な社会的、文化的な関係や規範によって形づくられていた。そのために、「伝統的」な家族というものをそれ自体としてただちに語ることは不適当であるということになる⁽²⁶⁾。

その他さらに“Familie”（“famille”）、つまり「家族」という概念とこの概念に結び付いている親密化した、外に対して閉ざされた家族生活の概念は、17世紀（フランス）および18世紀（ドイツ）以降に初めて公務員・被傭者・教養のある市民のような中級の市民階級に展開し、19世紀の後半になってようやく一般的に認められ始めたことは、例えば Otto Brunner と Philippe Ariès の研究によって明らかになされた⁽²⁷⁾。同じように特別の社会的な年齢段階である「幼年期」（Kindheit、フランスで17世紀以降、ドイツで18世紀以降）「青少年期」（Jugend、19世紀以降）、「老年期」（Alter、20世紀に）というものも徐々に形成されてきた。このことも家族生活の具体的な現実に大きな影響を及ぼす。例えば、子供は歩くことができるようになるとすぐに大人の小さな種類として扱われ、「幼年期」のような特別の人生の一時期がないとすれば、社会化と育成の問題も違うものになる。

世帯共同体の大きさや構成にとって家族周期と奉公人の状況(Gesindehaltung, 非家族成員であるものの受け入れ) が決定的であったということ⁽²⁸⁾, またこの消費と生産の統一体であり, 労働組織と生活関係に属する全ての人々を含む世帯共同体こそが, むしろ決定的な意味を持つ社会形態であったこと⁽²⁹⁾も歴史的家族研究ないし歴史的な家族社会学における概念規定の根本的な問題性を示していると思われる。これは血縁を基準にする家族概念が不適当であることを証明している⁽³⁰⁾。同じように「核家族」の概念⁽³¹⁾ないし親密性や親近感によって括られた家族の概念⁽³²⁾も有用でない。Rosenbaumは次のように述べている。

「家族社会的な研究にとって前述の方法的な考察はまず家族の普遍的な規定の試みを避けるべきことを意味する。家族 (Familie) という範疇が他の社会科学的な概念と同じように歴史的・社会的に規定されているならば, 異なった歴史的な時期と社会について, それぞれの場合に家族 (Familie) というものについて一般的に語ることができるかどうか, できるとすればその家族がどのような構造を持っているかが具体的に決定されなければならない。」⁽³³⁾

Schwäglér (1970 : 151-161) はすでに新しい経験的な研究の成果を踏まえて, 現代における「自律的な隔離された核家族」説が問題的事であることを指摘した。Rosenbaum は前工業化時代において, 社会階級・階層特殊化されない・比較的に統一的な家族構造が存在しなかったのと同じように現代社会においても家族 (Familie) という言葉を用いることを不可能にするようなそれぞれの社会階級・階層における家族構造の差異を見ることができると主張している⁽³⁴⁾。

Hausen, Mitterauer / Sieder, Rosenbaum の家族社会学に対する批判においては, 家族はいつもその具体的な歴史的・経済的・社会的・法律的・文化的等の, ならびに社会階級・階層上の関連において見るべきであるという家族社会学上の要請が一貫した趣旨として認められる。

4.

この要求において、Heidi Rosenbaum の家族社会学に対する批判の根本趣旨が示されている。

Rosenbaum は⁽³⁵⁾「隔離された・外に対して閉ざされた・自律的な・親密化した・そして感情化した核家族概念を包括的に理論的に批判した。彼女は Schelsky と König の家族社会学的なアプローチの中にこの概念が典型的に現れていると見ている。特に、この二人のアプローチの人類学的な基礎付け、および家族の構造変化の暗黙ないし明示的な指摘にもかかわらず結果的には前工業化時代的な大家族と現代的な小家族の二分法に帰結することの非歴史的方法を明らかにした。ここから彼女は、その対象を孤立して捉えるのではなく、これを社会経済的な関係の中において分析する家族社会学を要求する。次いで、現代の家族形態の歴史的な被規定性や社会的な分化性を指摘している。その場合に、彼女は家族構造の規定によって社会的な生産関係を決定的なものと捉え、現代においても家族生活の形成と可能性に重大な影響を与える生産過程の組織に対して家族の根本的に依存していることを重視する。

それらの理論的基礎的見解は彼女の1975年、1978年や1982年の諸論文に決定的な意味をもっている⁽³⁶⁾。歴史的家族研究の成果を広く取り上げることによって、彼女は、現存する諸家族形態の、とりわけ18世紀以降その成立の諸前提を明らかにし、歴史的関連を重視する家族社会学を発展させた。Rosenbaum は、生活諸関係の全体は、社会の諸部分が相互に分ち難く結ばれている一つの統一体であることから出発する。従って家族を孤立的に捉えることは彼女にとって不可能である⁽³⁷⁾。現代の諸家族形態をその社会的関連の中に置き、その発生史を考察にして、その社会階級・階層上の特殊性を重視して分析するという研究プログラムを彼女は定式化した。その場合には家族構造・機能と物質的な存在条件（生産や再生産の組織）との関係が決定的であるとされる。彼女は家族をいつもその社会的なコン

テキスト、その「社会的な位置付け」(soziale Verortung)において見るべきことを強調する⁽³⁸⁾。Hausenの歴史的家族研究の戦略プログラムはこのRosenbaumの研究プログラムに近いものである。しかし、Rosenbaumのそれは理論的かつ概念的にはるかに首尾良く根拠付けられていると考えられる⁽³⁹⁾。

『家族の形態』という大作⁽⁴⁰⁾でRosenbaumは自己の研究計画を18世紀以降のドイツの農民・手工業者・家内工業者・市民・労働者の諸家族形態の分析において例証的に実現することを試みている。彼女は次のように言う。

「それぞれの家族形態はその社会的生産の領域との特殊の結合や接合またこの領域の変動によって根本的に規定されている。根本的というのは次のようなことを意味する。それぞれに特殊に社会的な、従って歴史的に変動している生産の諸形態およびこれに結び付いている社会的な分化がこれらの特殊性を持った諸家族形態を生み出すのだということである。もっと具体的に言えば：何が(生産の種類)、どのような労働手段で(技術的な発展と分業の段階)、どのような社会的な条件の下で(所有関係・自営ないし雇用労働・他人に規定される度合等)生産されているかということが家族構造を決定的に形造るのであり、社会的役割の社会的な定義(すなわちそれぞれの場合に「父」・「母」・「子」・「妻」であることは何を意味するかということ)を決めるし、家族的社会化、消費や余暇の行動等を決定するのである」⁽⁴¹⁾。

5.

以上のような家族社会学への批判に対しては反批判が行われたことも注目しなければならない。René König (1974)はRosenbaumの博士論文に対して詳細なそして厳しい回答を示した。Tyrellはこれを次のように要約している。彼によれば、Rosenbaumは第一に家族社会学の立場の歴史的な相対化、特にKönigのそれを理解していない。第二に特にSchelskyの社会学の政治的に保守的な含意を論じている場合に見られるように「思想信

条に基づく社会学」(Gesinnungssoziologie)を展開している。第三に家族の一方的な経済的制約性を主張している。第四にその博士論文の第二版の中の König の反批判に対する回答においても、さらに1978年に発表した本『セミナー：家族と社会構造』⁽⁴²⁾においても彼女は自らの古い立場だけを繰り返して主張している⁽⁴³⁾。興味あることには Rosenbaum の1982年に発表した大作『家族の形態』は König のケルン学派の有力な雑誌『Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie』で書評されたことがない。

Tyrell は Karin Hausen の1975年に発表した論文についても詳しく論じている。一方で、彼は Hausen の家族社会学の非歴史的立場、特に現代家族の歴史性の不十分な考慮に対する批判に賛成しながら、他方で、Hausen がその研究戦略の展開の中で社会学的な概念、特に前に批判した家族社会学のそれを十分に考慮しないまま利用し、歴史的家族研究のための研究戦略の中ですでに適切に批判した家族社会学の要素を無思慮に再び取り入れることによっていわゆる社会学的隠語の世界に陥っていることを正しく批判していると思われる。Tyrell によれば、Hausen の論文の中の研究戦略の部分は全体として概念の不精密さや詰めの不十分さを示している⁽⁴⁴⁾。

最後に私見を述べれば、König や Tyrell の反批判は、特に Rosenbaum の理論についてその問題の核心を衝いていない。彼らの批判は結局のところ自己の以前の立場の再肯定にとどまるし、Rosenbaum 等によって示された現代家族形態の歴史的な制約性の問題の本当の意味は、なお十分には理解されていないと思われる。同じように、反批判者は新社会史学の家族研究の成果の意味も不十分しか理解してないと思われる。この研究の成果は、従来の家族社会学に支配的である集団論的パラダイムにおける核家族の普遍性の説は、17世紀以降発展した欧米の中産階級の家族形態の理念化に基づいていることを明らかにした。しかし、1960以降発生した集団論的パラダイムの危機は歴史研究の成果だけから由来しておらず、1960年代以降、

欧米の全ての社会に起こっている家族的な生活形態の多様化は、集団論的パラダイムに基づいて家族の危機だけとして不十分しか解釈できないことも集団論的パラダイムに対する批判の一つの根拠であるといわなければならないと思われる。私にとって興味あることは、落合の1989年の著作によって見せている通り、ドイツにおける論争のほぼ10年後日本にも従来の家族社会学に対してドイツとよく似ているような批判が提供され、落合の著作に関する書評から推測できるように従来の家族社会学者の同じような反応をもたらしていることである。

(本稿は1988年の夏に東京大学社会科学研究所および駒沢大学文学部の研究会に提供した発表の加筆したものである)

- 1 Schwägler 1970 : 132-151.
- 2 König 1966, 1970.
- 3 社会科学の歴史化は二つの意味に起こった。一方、社会科学の学説自体は歴史性を持つことが明らかになった。他方、社会科学が自分の方法で歴史上の問題を研究することになった。
- 4 雑誌『Annales E. S. C. (Economie. Société. Culture)』をめぐる学派。
- 5 勿論、アナル派はむしろ社会学的なアプローチを採用する研究者も含む。歴史的家族研究の発展とそれぞれのアプローチの批判に関しては Mitterauer / Sieder 1982 : 11-14および Hausen 1977 : 65-67に参照して下さい。
- 6 Hayami / Uchida 1972; Nakane 1972
- 7 この西洋の学者の研究の例としては Robert J. Smith (1972), Thomas C. Smith (1977) や Cornell (1981) の研究がある。
- 8 ドイツにおける歴史的家族研究の発展について Mitterauer / Sieder 1982 : 18-21および Hausen 1977 : 67-68に参照して下さい。
- 9 「家族構造」という概念はそれ自体極めて多義的である。
- 10 ケンブリッジ・グループは“Cambridge Group for the History of Population

and Social Structure”の省略であり、MHSは“Mean Household Size”つまり「平均世帯規模」を意味する。ケンブルッジ・グループの方法の問題点に関して Mitterauer / Sieder 1982 : 21-24 ; Rosenbaum 1975 : 211-225 ; Berkner 1975を参照して下さい。

- 11 ドイツの従来の家族社会学の家族観の特徴付けに関しては Rosenbaum 1978 b : 10 ff. ; Rosenbaum 1982 a : 41 ff. ; Hausen 1975 : 175-178に参照して下さい。ドイツの批判者は従来の家族社会学における家族観の特徴として理解するものは、落合 (1989 : 142-162) が家族社会学史上の「集団論的パラダイム」として定義したものにほぼ相当すると思う。
- 12 Rosenbaum 1978 b : 9-10。
- 13 König 1969 : 257。
- 14 戸田 1982 : 37。
- 15 Rosenbaum 1978 b : 13。
- 16 戸田 1982 : 37。戸田の弟子である喜多野清一は両親と未婚の子供からなるグループを「家族の核」と規定した。戸田と喜多野の学説はその後有賀喜左衛門によって厳しく批判され、これはいわゆる「有賀・喜多野論争」と中心になった。有賀の批判の幾つかの点は Rosenbaum のドイツの家族社会学に対する批判によく似ていることが面白いと思う。有賀1969, 1970, 喜多野1986 a , b , 青山1976に参照して下さい。
- 17 Rosenbaum 1978 b : 13 ; 1982 a : 43-45 ; Hausen 1975 : 178に参照して下さい。
- 18 Hausen 1975 : 188。
- 19 Rosenbaum 1978 a 。
- 20 Rosenbaum 1978 a : 108。
- 21 この方法の詳しい説明は Rosenbaum 1975および Berkner 1975にあげた。
- 22 Laslett 1972, 特に5-10 ; Mitterauer 1978 b ; Mitterauer / Sieder 1984 : 13-91 ; Rosenbaum 1975 ; 1978 b : 35-36 ; 1982 a : 47 ; Hausen 1977 : 71-72。
- 23 Rosenbaum 1975 : 216-217 ; Mitterauer / Sieder 1982 : 21-24。

- 24 この時期は大体に史料制約によるものであり、この前の時代については信頼の於ける研究は現在まで少ない。
- 25 上述の日本についての研究は家族形態の多種多様性の大体ヨーロッパと同じような傾向を示している。
- 26 Mitterauer / Sieder 1984 ; Rosenbaum 1978 b : 23 ff . ; Hausen 1977 : 71-72。
- 27 Brunner 1952 ; 1978 ; Aries 1978。Rosenbaum 1978 b : 21や Mitterauer 1978 a にも参照して下さい。
- 28 MHS 測定で大きな世帯の場合ですら多世代家族や拡大家族を見出すことは非常に少ない。一般的に、中央ヨーロッパにおける大規模な世帯は奉公人のような非血縁者の受け入れに基づいた。
- 29 Hausen 1977 : 70-71。
- 30 Rosenbaum 1975 : 215-216 ; Mitterauer / Sieder 1982 : 18-19。この点是有賀喜左衛門による戸田貞三および喜多野清一の批判の中心も成した。
- 31 Hausen 1975 : 193-195に参照して下さい。
- 32 Rosenbaum 1978 b : 21に参照して下さい。
- 33 Rosenbaum 1978 b : 20。
- 34 Rosenbaum 1978 b : 25-26。
- 35 Rosenbaum の家族社会学に対する批判は、初めて彼女の1973年の博士論文において展開し、更に1978年にはこの博士論文の改訂版で再刊された(Rosenbaum 1978 a)。
- 36 Rosenbaum 1975 ; 1978 b : 12-13 ; 1982 a : 45-46。
- 37 Rosenbaum 1978 b : 18-20。
- 38 Rosenbaum 1978 b に参照して下さい。
- 39 Hausen 1975 : 195 ff . に参照して下さい。
- 40 Rosenbaum 1982 b 。この本は Rosenbaum の Habilitationsschrift , つまり大学教授資格の取得のための論文であった。
- 41 Rosenbaum 1982 b : 18。
- 42 Rosenbaum 1978 b 。

43 Tyrell 1980 : 15,18。

44 Tyrell 1977 : 686 ff .。

参考文献

1. 青山道夫 (1976) : 「日本の「家」の本質について — 有賀・喜多野論叢を中心として」, 福島正夫 (編) : 『家族 政策と法』, 7, 東京 : 東京大学出版会, 9~51。
2. Ariès, Philippe (1978) : *Geschichte der Kindheit*. München : DTV
(*L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime*. Paris : Plon 1960)
3. 有賀喜左衛門 (1969) : 「日本の家」, 『有賀喜左衛門著作集』, 7, 東京 : 未来社, 265~319。(初版 : 1952)。
4. 有賀喜左衛門 (1970) : 「家族と家」, 『有賀喜左衛門著作集』, 9, 東京 : 未来社, 17~51。(初版 : 1960)。
5. Berkner, Lutz K. (1975) : The Use and Misuse of Census Data for Historical Analysis of Family Structure. In : *Journal of Interdisciplinary History*. Vol. 4 : 721-738.
6. Brunner, Otto (1952) : Die alteuropäische Ökonomik. In : *Zeitschrift für Nationalökonomie*. Bd. 13 : 114-139.
7. Brunner, Otto (1978) : Vom “ganzen Haus” zur “Familie”. In : Heidi Rosenbaum (ed) : *Seminer : Familie und Gesellschaftsstruktur*. Frankfurt / M : Suhrkamp. p. 83-91.
9. Cornell, Laurel Louise (1981) : *Peasant Family and Inheritance in a Japanese Community: 1671- 1980. An Anthropological Analysis of Local Population Registers*. Baltimore, Maryland : PhD - Diss, The Johns Hopkins University.
10. Hausen, Karin (1975) : Familie als Gegenstand Historischer Sozialwissenschaft. In : *Geschichte und Gesellschaft*. Jhg. 1 : 171-209.
11. Hausen, Karin (1977) : Historische Familienforschung. In : Reinhard Rürup (ed.) : *Historische Sozialwissenschaft. Beiträge zur Einführung in*

- die Forschungspraxis* . Gottingen : Vandenhoeck & Ruprecht . p . 59-95.
12. Hayami , Akira & Uchida , Nobuko (1972) : Size of Household in a Japanese County throughout the Tokugawa Era . In : Peter Laslett & Richard Wall (ed .) : *Household and Family in Past Time* . Cambridge : University Press . p . 473-515.
 13. König , René (1966) : Alte Probleme und neue Fragen in der Familiensoziologie . In : *Kolner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* . Jhg . 18 : 1-20.
 14. König , René (1969) : Familie und Familiensoziologie . In : Wilhelm Bernsdorf (ed .) : *Wörterbuch der Soziologie* . Stuttgart : Enke . p . 247-262.
 15. König , René (1970) : Old Problems and New Queries in Family Sociology . In : Reuben Hill & René König (ed .) : *Families in East and West* . The Hague : Mouton . p . 602-622.
 16. König , René (1974) : Besprechung : Heidi Rosenbaum , Familie als Gegenstruktur zur Gesellschaft . In : *Kolner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* . Jhg . 26 : 661-665.
 17. 喜多野清一 (1986 a) : 「同族組織と封建遺制」, 光吉利之・松本通晴・正岡寛司 (編) : 『リーディングス日本の社会学 3 伝統家族』, 東京 : 東京大学出版会, 68~81。(初版 : 1951)
 18. 喜多野清一 (1986 b) : 「日本の家と家族」, 光吉利之・松本通晴・正岡寛司 (編) : 『リーディングス日本の社会学 3 伝統家族』, 東京 : 東京大学出版会, 38~52。(初版 : 19)
 19. Laslett , Peter (1972) : Introduction : The History of the Family . In : Peter Laslett & Richard Wall (ed .) : *Household and Family in Past Time* . Cambridge : University Press . p . 1-89.
 20. Lutz , Peter Cristian (ed .) (1972) : *Soziologie und Sozialgeschichte* . Opladen : Westdeutscher Verlag . [= Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie Sonderheft ; 16].

21. Mitterauer, Michael (1978 a) : Problematik des “Familie” im 17. Jahrhundert. In : Heidi Rosenbaum (ed.) : *Seminar : Familie und Gesellschaftsstruktur*. Frankfurt / M : Suhrkamp . p .73-82.
22. Mitterauer, Michael (1978 b) : Der Mythos von der vorindustriellen Großfamilie. In : Heidi Rosenbaum (ed.) : *Seminar : Familie und Gesellschaftsstruktur*. Frankfurt / M : Suhrkamp . p .128-151.
23. Mitterauer, Michael & Sieder, Reinhard (1982) : Einleitung. In : Michael Mitterauer & Reinhard Sieder (ed.) : *Historische Familienforschung*. Frankfurt / M : Suhrkamp . p .10-39.
24. Mitterauer, Michael & Sieder, Reinhard (1984) : *Vom Patriarchat zur Partnerschaft . Zum Strukturwandel der Familie*. München : Beck .
25. Nakane, Chie (1972) : An Interpretation of the Size and Structure of the Household in Japan over Three Centuries. In Peter Laslett & Richard Wall (ed.) : *Household and Family in Past Time*. Cambridge : University Press . p .517-543.
26. 落合恵美子 (1989) : 『近代家族とフェミニズム』, 東京 : 勁草書房。
27. Rosenbaum, Heidi (1975) : Zur neueren Entwicklung der historischen Familienforschung. In : *Geschichte und Gesellschaft*. Jhg . 1 : 210-225.
28. Rosenbaum, Heidi (1978 a) : *Familie als Gegenstruktur zur Gesellschaft . Kritik Grundlegender theoretischer Ansätze in der westdeutschen Familiensoziologie*. Stuttgart : Enke 2. rev. Aufl.
29. Rosebaum, Heidi (1978 b) : Einleitung. In : Heidi Rosenbaum (ed.) : *Seminar : Familie und Gesellschaftsstruktur*. Frankfurt / M : Suhrkamp . p .9-54.
30. Rosenbaum, Heidi (1982 a) : Die Bedeutung historischer Forschung für die Erkenntnis der Gegenwart dargestellt am Beispiel der Familiensoziologie. In : Michael Mitterauer & Reinhard Sieder (ed.) : *Historische Familienforschung*. Frankfurt / M : Suhrkamp . p .40-63.
31. Rosenbaum, Heidi (1982 b) : *Formen der Familie . Untersuchungen zum*

Zusammenhang von Familienverhältnissen , Sozialstruktur und sozialem Wandel in der deutschen Gesellschaft des 19. Jahrhunderts . Frankfurt / M : Suhrkamp .

32. Schwägler , Georg (1970) : *Soziologie der Familie . Ursprung und Entwicklung .* Tübingen : Mohr .
33. Smith , Robert J .(1972) : Small Families , Small Households and Residential Instability : Town and City in 'Pre - Modern' Japan . In : Peter Laslett & Richard Wall (ed .) : *Household and Family in Past Time .* Cambridge : University Press . Press . P .429-471.
34. Smith , Thomas C .(1977) : *Nakahara : Family Farming and Population in a Japanese Village , 1717- 1830 .* Stanford , Cal . : Stanford University Press .
35. 戸田貞三 (1982) : 『家族構成』, 東京 :新泉社。(初版 :1937)。
36. Tyrell , Hartmann (1977) : Historische Familienforschung und Familiensoziologie . Versuch einer Zwischenbilanz und Kritik eines Forschungsprogramms . In : *Kolner Zeitschrift fur Soziologie und Sozialpsychologie .* Jhg . 29 : 677-701.
37. Tyrell , Hartmann (1980) : Altes und Neues von der Familie . In : *Soziologische Revue .* Jhg . 3 : 11-21.
38. Wehler , Hans - Ulrich (ed .) (1973) : *Geschichte und Okonomie .* Köln : Kiepenheuer & Witsch .
39. Wehler , Hans - Ulrich (ed .) (1974) : *Geschichte und Psychoanalyse .* Frankfurt a . M . / Berlin / Wien : Ullstein .(初版 :1971)。
40. Wehler , Hans - Ulrich (ed .) (1984) : *Geschichte und Soziologie .* Frankfurt / M : Fischer - Athenäum .(初版 :1976)。